『熊本県立大学大学院文学研究科論集』3号.2010.9.30

蘆花のなかの徳冨愛子

―夫が語る妻の形容―

半藤英明

一、実像と事実

徳冨蘆花（一八六八―一九二七）のさまざまな作品に描かれる人物たちは、恐らくは「実像」と「フィクションとしての虚像」とが渾然としている。その中で、彼の妻、愛子（一八七四―一九四七）は、如何に描かれているだろうか。

夫妻の人生、また、生活を辿れば、蘆花と愛子とがほぼ一心同体のごとき存在であることは衆目の一致するところである。愛子によれば、「夫婦愛の坩堝のなかで、一つのものに熔かしあひ、文字通りの一心同體と思ひうる境地を目がけて鍛へつづけたのでございました」（239頁）。すなわち、蘆花の歴史を辿ることは、愛子を辿ることにもなる。

蘆花の作品の中で語られる愛子の姿は、紛れもなく、彼の意識の反映である。そこでは、夫の語る妻の姿が真実のものか否かは問題ではない。人の真実、とりわけ、人の内面性は、語りでは明らかにされない。語りは、もはや話者の主観の中にある。人の真実を明らかにできるものがあるとすれば、それは事実のみである。

たとえ愛子自身の告白とても、それが事実であるとは限らない（行為としての事実ではあるが）。人の姿を見極める道は、客観的な事実に基づくか、そうでなければ、（他人または本人によって）語られたものの検討を積み重ねることにより、実像をはかることでしかあり得ないと思う。

蘆花の作品では、紀行文の『順礼紀行』『死の蔭に』『日本から日本へ』に愛子が登場し、小説では『思出の記』の松村敏が愛子をモデルにしているとされるほか、告白的自伝小説『富士』には肥後駒子の仮名で愛子が登場する（愛子は「私どもの結婚生活については、二人の共著『富士』に委曲をつくして書いてをります」（242頁）と述べている）。ここに、蘆花の作品から愛子の実像をはかるについては、まずはノンフィクションの記述が適当と考えられるが、紀行文は人物の内面性について描くようなことが少ないから、本論では、随想集の『みみずのたはこと』および『新春』に描かれている愛子の記述を辿ることで、その実像を蘆花の意識として読み解いていく。先行文献の人物評や愛子の叙述なども参考にするが、それにとらわれず、虚心坦懐に蘆花の記述に向かうことにしたい。

テキストは「蘆花全集」（蘆花全集刊行會、昭和3年）の第九巻（『みみずのたはこと』）、第十巻（『新春』）を使用した。引用に続く数字は当該の頁を表している。引用文のルビは、適宜残した。なお、前掲のものをも含め、所々に引く愛子の発話は『現代婦人傳』（中央公論社、昭和15年）に拠っている。

二、『みみずのたはこと』の愛子

『みみずのたはこと』は、東京・粕谷における美的百姓の生活、すなわち「趣味の百姓」（242）としての日常を、さまざ

まな出来事を交えて書いたものである。随想集であるから、愛子の実像、もしくは、それに近いところが語られている筈であるが、吉田正信（二〇〇八）には「実話を基本に虚構もまじえることによって、後期から本名で著わすことにした健次郎好みの、生活と心境が語られている」（245頁）とある。

『みみずのたはこと』での愛子の記述は断片的である。布川純子（二〇〇六）は、『みみずのたはこと』が篇の数として「自然主義的文章」「自然と一体化した生活を描いた文章」を多くしているとし、その意味を「この世にはちょっとした善悪の理屈ではどうにもならぬものもあるということを蘆花が認識した」ものと説く（47頁）。そのようなテーマ性のためでもあろうか、愛子そのものを語る記述は多くない。それでも、蘆花の視線の幾つかから愛子への評価を浮かび上がらせることはできる。

○自然が好きな彼女には、田園生活必しも苦痛ばかりではなかった。唯潔癖な彼女は周圍の不潔に一方ならず惱まされた。（39）

ここに、愛子が「自然が好き」で「潔癖」な女性であると知ることができるが、そんな愛子は、いかにも無邪気な性格の女性として次のように語られている。

○煤竹色の被布を着て痛さうに靴を穿いて居る白粉氣（おしろいけ）も何もない女の容子を　以下略　（24）

○妻は一張羅の夏帯をぬらすまいとて風呂敷を腰に巻き、單衣の裾短に引き上げて、提灯ぶら下げ、人通りも絶え果てた甲州街道三里の泥水をピチヤリ〳〵足駄に云はして歸つた。（155）

○（夕立にあたり）「此れをかぶつていらつしやいな」と云って、妻は硝子の大きな盂（はち）を持て來た。（183）

○稀には彼が出たあとで、妻兒（さいじ）が入ることもある。青天白日、庭の眞中で大びらに女が行水するも、田舍住居のお蔭である。（196）

○「何て綺麗な水でしやう」妻は舷側（ふなばた）の水を兩手に掬ひ上げて川を讃める。（505）

見方によっては少々はしたない行為に思えるものも、愛子の飾り気のなさ、おおらかな人柄を表すものと解釈すべきであろう。愛子は自身について「私の家は田舍の物持」で「ただもう兩親に可愛がられるばかりで、順境のなかをぼんやりと無邪氣に育つて參りました」（238頁）と述べている。彼女の無邪気さと潔癖さは、次の表現とも繋がってくる。

○日曜だが、來客もなくて靜なことだ。主と妻と女兒（ぢょじ）と、日あたりの好い母屋の南縁で、日なたぼつこをして遊ぶ。（463）

○（コイヌガウマレマシテ、カワイコトデアリマス）これは鶴子女史が生れてはじめての作文だ。細君が其下に記憶の爲「ゴネントムツキ」と年齢をかゝせた。（465）

どちらも穏やかな家族の一場面を映し出しているが、そこには養母たる愛子の細やかな気遣いが見える。描写の背後に愛子の穏健さ、堅実さが見え隠れしている。但し、事実を踏まえれば、それらは自身の子を授からなかった苦悩を抑えての風景である。

ところで、愛子は女子高等師範に学んだ才媛であり、且つ、徳冨愛子として文筆家ぶりを発揮した人物である。蘆花にすれば、潜在的に敬意の対象であった。そのせいもあろうか、「儂の家族」（11）である学のない「女中」に、蘆花は次のように書いている。

○今年二十歳だが碌にイロハも讀めぬ女だ。東郷大將の名は知つて居るが、天皇陛下を知らぬ。明治天皇崩御の際、妻は天皇陛下の概念を其原始的頭腦に打込むべく大骨を折った。（11）

しかし、この「原始的頭腦」のぬしは、母と死別して八歳から農家の奉公に出ていた「無懐氏の女」（12）である。無懐氏は、土、すなわち、農を重んじ、太平の治世を築いた中国の伝説の王のこと（明治時代の教養書である『史記』『漢書』『管子』『芸文類聚』『初学記』『太平御覧』等に見られる）。愛子によれば、「（一族の中で）主人の健次郎だけは才能をあまり認められもせず、全く日陰の存在として、逆境のなかを育つてきました」（238頁）とあり、農とともに太平に生きてきた女は、呆れるばかりに逞しく、蘆花自身のコンプレックスを取り込みながら、蘆花の中にある女性（一般の）像を敬意の対象へといざなう。

○農の弱味は女の弱味である。女の強味は農の強味である。蹂躙される様で實は搭載し、常に負ける様で永久に勝つて行く大なる土の性を彼等は共に具へて居る。（218）

これは、蘆花の女性観が正直に現れたところであろう。男尊女卑的な意識が記述の男性特有の優越的な感性によく現れ

ているが、「常に負ける様で永久に勝つて行く大なる土の性」とは、男性たる蘆花の素直な敗者の弁である。蘆花夫妻の修羅場は「蘆花日記」に詳しいが、蘆花が愛子に対しても「性」に根ざした「到底かなわぬもの」を感じていたことは間違いない。

ここまでにより、やや踏み込んで推察すれば、愛子とは、少女のような無邪気さとおおらかさ、また、健康的な性向を持ちつつ、女性ならではの逞しさをも備えた女性である、と言い得る。

三、『新春』の愛子

『新春』は「春信」「春の山から」「パレスチナの回顧」「ヤスナヤポリヤナの回顧」「春は近い」「私の松」「九十九里」の各章から成る。愛子を語る場面が豊富なことから、『新春』は、愛子を理解するにも貴重な作品であると言える。

始めに、蘆花に寄り添う愛子の姿を見よう。文章中に「私共」を主語とする表現が多用される通り、愛子は日常的に蘆花に寄り添っている。

○中程から影の如く添ふて來る女の姿も見えます。それは私の妻です。（269）

○私共は生きる。だから喧嘩をします。（略）喧嘩のお蔭で、私共は健にして居ます。（271）

○前の半途（はんみち）は父がいたはり、後の半途は私のイヴがいたはつてくれたので、死んでもしまはなかつたのですが、それはもう言葉に盡せぬ重いものでした。（298）

○唯此弟の放浪には始終妻がくつゝいて歩くのと、以下略（334）

○私共の從來の生活方針は、全く食、住、衣の順序でした。（略）生命から二番目の果物ですから、私共はそれに抛つ金を少しも惜しく思ひません。（347）

○（伊香保にて）三十三の私も、二十七の妻も、お話にならぬ若い一對でした。（374）

それでも、明治三九年、蘆花の『順礼紀行』の旅（約四ヶ月間）の際には、さすがに夫妻も別々の時間を過ごすことになった。

○麻布の其學校（＝英和女學校）には、私が順禮行の間、妻も生徒になつて寄宿して居たこともあります。（387）

次の表現には、愛子に対し、何処までも自分に寄り添っていてほしいとする蘆花の願望が現れている。

○私は四月四日逗子を立つ時、妻と約束して、これから毎日一章づゝ新約聖書を讀まう、讀む章の上で二人の心を通はさう、と誓ふた。（432）

これに愛子は「毎朝、私は、出發に際して主人と約束しました通り、新約聖書のマタイ傳の初章からはじめて、一章づつ讀むことを樂しい日課にしてゐました」（256頁）と素直に応じている。このあたりの記述からは、夫妻の人生・生活に距離感のようなものは全くもって存在しないと思える。

愛子の女学校（＝東洋英和女学校）への寄宿時代を知る村岡花子は、当時の愛子（三二歳）について「ものごしの優し

い、寂しげな風情の、中年婦人」と記し、「私が見るたびにその人の眼がひどく腫れあがっていた」と、自身の随筆集である村岡花子（二〇〇四）に書いている（35頁）。村岡は「それはほんとうにひどい腫れかたで、あまり大きくなかったその眼は、ふさがってしまうのではないかと、私を心配させたくらいであった」（同頁）とも書いており、学びつつ、また、夫を想いつつ夜更かしをしていたか、または、始終泣いていた愛子の姿が髣髴とされる。村岡恵里（二〇〇八）には「花子が部屋を訪ねると、愛子はよく蘆花先生に手紙を書いていた」（74頁）とある。これも、蘆花に寄り添う愛子の姿である。ただ、愛子は、このときのことを「決して淋しいことはありませんでした」と語っている（257頁）。

愛子は、蘆花の仕事面にも深く関わっている。

○（『黒い目と茶色の目』を）書くは一月で書きましたが、それを公にするしないについて、夫婦の間に悪戰苦闘の日が續きました。（略）私も妻も連日の揉み合ひで、心身共に疲れ切つて居ました。（380）

○私共は原稿の整理や校正に忙しい日を送りました。（382）

これらは、蘆花の作家活動において、愛子がいわば同志の存在であったことを物語っている。清書の筆（遺品から知られるように、愛子は達筆である）や「原稿の整理や校正」（上記）に留まらない。本田節子（二〇〇七）には「夫婦は毎日毎晩、聖書を中に話しあい、論争に論争を重ねた結果の『新春』執筆であった」（251頁）とあり、前掲の通り『冨士』は夫妻の共著である。昭和期の「蘆花全集」出版も、愛子の大きな功績である。

夫妻のすさまじい葛藤を経て『黒い目と茶色の目』が出た頃、彼らは伊香保に遊ぶが、その三ヶ月後、愛子は「積年の

無理が一時に決濟を促して來て」大病になり、「最初の半月を自宅に、後の四月を病院に」（385）過ごした。蘆花にとっては戦友が倒れたかのような出来事であったろう。病み上がりの姿は「幽霊のやうな妻」（386）であった、とあり、普段は健康的な愛子からの変貌ぶりが伝わる。そのあたりをも踏まえ、本田節子（二〇〇七）は「蘆花作品の多くは、愛子がいてこそ生まれたとさえいえる」（9頁）と書いている。

そんな愛子は、蘆花から見れば「運命の女性」であったに相違ない。そのことは、次の表現から知られる。

○私の結婚は全く父母の意志でありました。父母によつて私に與へられた妻の名が「愛」であるのは、何と云ふ深い親心の表現でありませう！　愛！　女性の愛！　それこそ私が五歳の失戀から渇き渇きて死ぬ程渇いて居たそれではありませんか。（280）

○つまり私が父の罪を負はねばならぬやうに、妻は母の罪を負はねばならなかつたのです。（281）

このような蘆花の思い込みは、愛子にとって実は有難迷惑ではなかったか。ただ、夫妻間に幾多のさざ波、荒波が立とうと、それらを悉く乗り越えて、ついに添い遂げることができたのは、次のような愛子の気質があってのことだろう。

○妻は二十一歳の自然女兒でありました。自然女兒は無邪氣に愛し愛さるゝ外何も知りません。（282）

○私の妻はもとより生れながらのイヴでした。（287）

愛子は「自然女兒」としての純粋さを持ち、無邪気でおおらか、また、女性らしい本能を備えていた女性だった。この

あたりは『みみずのたはこと』の愛子像とも通ずるところである。その様子は、次の愛子の具体的形容にも表れている。

○駕籠だつた榛名の外は、運動靴にゲートルで妻はいつも歩きました。（393）
○私共は石を枕に足投げ出して、時には洋傘（かさ）や面紗（ヴェール）であまりに明るい日光を避けて、うつらうつらとなつたり、とりとめもない話をしたりします。（394）
○濱の散歩に、可愛いもの好きの妻は波から生るゝ「ナミコ」の姿容（かたち）も名も如何にも可愛氣なのを愛でゝ、女をもつたら「浪子」とつけたい、と申して居ました。（493）
○私の妻は大トルストイに一度豆腐を食はせたいと云ふて居た。（451）

そこには気取らない愛子のほかに、時に女性らしくお洒落な愛子も描かれている。愛子は無邪気な「自然女兒」ばかりではなかった。しかし、「トルストイに一度豆腐を食はせたい」とは、如何にも無邪気で女性らしい気の付きようである。こうして見てくると、『新春』での愛子の記述は、蘆花にとって愛子が不可欠無二の存在であったことを浮かび上がらせる。蘆花が自らをアダムに、愛子をイヴにたとえたのも、そのことを顕著にするものである。

蘆花は、自らの性欲を持て余し、体毛の濃さ（愛子によれば「熊のやうに毛深い」、243頁）を気に掛けるなど、押しなべてコンプレックスの強い人物であった。その蘆花に徹底的に寄り添う愛子は、蘆花にとっては敬意にも似た愛情を抱かせる稀有の存在であったろう。蘆花にとことん寄り添うことのできる女性は「自然女兒」として眼前の夫に健気に仕える愛子しかいなかったとさえ思える。愛子は、自身の学齢期を指して「從順でひがみのない性質を植ゑつけられてゐました」

（239頁）と述べている。

最後に、愛子の美形が回想的に語られている箇所を挙げよう。

○結婚と申せば、私共も今年の五月五日に銀婚を祝ひます。喧嘩しい〳〵二十五年早くも經ちました。（略）見る程の女達の羨望の的であつた烏羽玉（うばたま）の眞黒々（まつくろくろ）であつた花嫁の髪も薄くなつて、白いのがぽつ〳〵見えて來ました。（270）

現存する幾多の写真にも残されているように、愛子は美しい黒髪が自慢の女性だった。蘆花のさりげない自慢とも思えてくる一文であり、濃厚な愛情表現よりも、かえって愛の深さが感じられる。

四、愛子の実像をはかる

ここまでに蘆花の意識として読み進めてきた愛子の実像は明確である。愛子の内面性をはかるものとして抽出されるキーワードは「自然が好き」「潔癖」「土の性」「自然女兒」「無邪氣」等である。これらは相互に矛盾するところがなく、全体的なイメージとしては、大地に根ざした人間の力強さを象徴している。それらが「愛子とは、少女のような無邪気さとおおらかさ、また、健康的な性向を持ちつつ、女性ならではの逞しさをも備えた女性である」（前述）の推察に結び付くところである。

ただ、人は誰しも多面的である。そのようなイメージとはやや異なるところも指摘される。愛子の生涯を綴った本田節

子（二〇〇七）によれば、「愛子はやや対抗意識の強いところがあり、生家は豪商との意識に、女高師卒との誇り、加えて蘆花の妻との思いもあって勝ち気だ」（297頁）と説かれる。文豪・徳冨蘆花の妻としての愛子の人生は、それなりに誇り高いものであったと推察され、愛子の一生を視野に入れながらトータルにはかるならば、その実像は、もう少し混沌とするかも知れない。

愛子には幼きより学問に親しんだ過去があり、また、水彩画の筆を取ったり、和歌、音楽（オルガン）をもたしなむ教養の深さがあった。そのような、前述までの蘆花の語りから外れた愛子の歴史は見逃すことはできないだろう。

愛子は、新婚時の自身が「戀といふものを知らない幼稚な女」であり、「主人は、私に燃えるやうな情熱を求めてゐたのでせうに、愛の技巧を知らない私は、感情を押へた昔風の大人しい態度しかとれなかつたので、主人は、『公平な妻は要らない』と申して、私を罵りました」（244頁、傍線は半藤）と回想する。その叙述からする限り、これが当時の愛子の分別である。蘆花の癇癪や妻への不満は今時の所謂ＤＶを示すが、蘆花の記述としては明らかにされぬものの、愛子は「いつの間にか私は、主人の發作的な亂暴を堪へ忍んでゐるうちに、夕立のような痛快なものを感じるやうになつてゐました」（246頁）と告白する。このような自己抑制的な精神力は、愛子の実像をはかる上で無視できまい。

更に言えば、『順礼紀行』の直前の別居宣言、『黒い目と茶色の目』発表までの蘆花との葛藤など、（結局は夫の愛情を確かめることにも繋がったが、）夫への強い対抗心は、愛子の熱情的な激しい気性を感じさせる。これも顧みられなくてはならないだろう。

そこで、蘆花の意識として読み解くことの範囲は超えてしまうものの、それらをも加味し、ここに結論的に述べるならば、本論で捉えた愛子の実像とは、見かけの女性らしさの中に、生来の野太くも健全な精神性と生命力とを抱え、更には、

教育を積み上げることで得たに違いない洞察力と自己制御の能力とを蓄えた知的婦人像である。

参考文献

布川純子（二〇〇六）「徳冨蘆花『みみずのたはこと』」『成蹊人文研究』第14号
本田節子（二〇〇七）『蘆花の妻、愛子　阿修羅のごとき夫なれど』（藤原書店）
村岡恵里（二〇〇八）『アンのゆりかご　村岡花子の生涯』（株式会社マガジンハウス）
村岡花子（二〇〇四）『村岡花子随想集　をみなれば』（赤毛のアン記念館・村岡花子文庫）
吉田正信（二〇〇八）『梅一輪　湘南雑筆（抄）　徳冨蘆花作品集』（講談社文芸文庫）

（付記）本稿は、「徳冨愛子生誕一三五周年記念講演会」（平成二二年二月二〇日、菊池市文化会館）での講演内容に加筆したものである。